

# 未来を変える／東京大学大学院工学系研究科教授・総長特別参与の沖大幹

ツイート

シェア 0

LINEで送る

(2020/7/28 05:00)



沖大幹氏

## 不要不急を考える

SDGsの進捗（しんちよく）管理は毎年7月の国連ハイレベル政治フォーラムで行われているが、国連本部の大幅なテレワークを反映し、サイドイベントも含めて今年はずべてオンラインで行われた。

各セッションでは新型コロナウイルス感染症（COVID-19）とSDGsの各目標達成に向けた取り組みとの関連などがそれぞれ議論され、オンライン開催でも期待される成果がそれなりにあがったようである。

しかしながら、オンライン会議では、コーヒープレイクの間にも昔ながらの仲間と情報交換をしたり、知り合いに紹介してもらって新たな人的ネットワークを構築したり、あるいはランチやディナーで現状分析と今後の戦略について話し合ったり、といった機会は得られない。

昔ながらの友人と知恵を出し合ったり、旧知の仲間と一緒に仕事したりするのは仮想空間上でも何の問題もないかもしれない。しかし、スナックをつまみながらとり

とめのないおしゃべりをしたり、食事をしながら世界政治から個人的な関心までさまざまな話題について腹を割って話したりすることなく、オンラインでのコミュニケーションだけで新しく知り合った者同士が果たして相互に信頼できる人間関係を築いてうまくやっていけるのだろうか。おそらく多くの方が不安を感じているに違いない。

そういう意味では、休憩時間や会食など、効率重視の面だけから考えると一見無駄にも思える機会が重要な意味をもっていることになる。

COVID-19の緊急事態宣言下では、不要不急の外出や行動が控えられ、結果として芸術やエンターテインメント、旅行など、なんとか生きながらえるだけの最低限の生活には不要とも考えられがちな「精神的な豊かさ」の部分が犠牲になった。実は、SDGsでも、文化、スポーツ、芸術、エンターテインメント、祭り、知的好奇心の充足など、「不十分でも直ちには命を落とさない人間の営み」は軽んじられている。



今、暮らしのインフラを守る皆様に感謝。



私たちはガス検知技術で皆様を応援します。

理研計器株式会社

国連事務総長によって任命された独立科学者グループが2019年9月に公表した「持続可能な開発に関するグローバル報告書（GSDR2019）」にも武力紛争や動物の福祉とともに、精神的な価値や文化がSDGsでは見落とされているという指摘がある。SDGsに掲げられたいずれの目標も、より良い世界におけるより良い我々の生活の実現に不可欠であるが、それだけで十分というわけではない。

最低限必要な食料、水、エネルギーへのアクセスもままならない暮らしを何とか改善しよう、あるいはCOVID-19下における不慮の死をできるだけ減らそうと奮闘している状況下では「衣食足りて礼節を知る」だからと、そうした側面の優先順位を下げたくなる心情も理解できる。しかし、むしろ極度の貧困や生死を分けるような状況下でこそ精神的価値や文化が我々にとって大きな意味を持つのではないだろうか。

「無用の用」は老子の教えとされ、形のないもの（中身）の価値が、形あるもの（入れ物）に価値をもたらしている、というのが原義である。SDGsに当てはめて考えると、社会的公正性や環境保全の実現などを通じて精神的な豊かさがもたらされるからこそ、特に前半に掲げられた、どちらかといえば物質的な豊かさの充足に意味があるのではないだろうか。

【略歴】おき・たいかん 87年（昭62）東京大学工学部卒業、93年工学博士、気象予報士。同大生産技術研究所助教授、文部科学省大学共同利用機関・総合地球環境学研究所助教授などを経て、06年東大教授。16年10月より国際連合大学上級副学長、国際連合事務次長補も務める。水文学部門で日本人初のアメリカ地球物理学連合（AGU）フェロー（14年）。



営業を再開したユニバーサル・スタジオ・ジャパン（U S J）の入場口前で、来園者の検温をするスタッフ= 8日、大阪市此花区